

2015年度 自己点検・評価【文学部】

C票

<目標、行動計画>策定シート

作成日:2016年2月19日

責任者	文学部長	作成部局	文学部
-----	------	------	-----

2021年度に向けた教育研究目標

【A票:教育研究目標1】

(タイトル)

人文学の基礎を学び裾野を広げる。

(狙い内容)

人間存在とその営みを深く学ぶことについての興味や関心を持つきっかけを与え、そこで生じてくる課題を人文学のさまざまな知を学びながら解決していく能力を育てる。

1. 6年後(2021年度)のめざす姿(目標)

初年次教育および二年次教育の活性化に基づき教養教育と早期専門教育とが両立するシステムが構築・運用されている。

2. 上記の目標を設定した背景、課題及び現状分析について、記述してください。

2003年度より施行されている現行のカリキュラムは、当時の入試制度に基づき、1年次に所属専修が決まっていない学生がいることを前提とした制度となっているが、その後の入試制度の改変に伴い、入学制度とカリキュラムとの間に隙間があり、それを埋めるために、教養養成と早期専門教育とを両立しうる新しい工夫を考える必要がある。また現行のカリキュラムでは、1年次の「人文演習」および3・4年次の「演習」とがあるが、多くの専修には2年次に「演習」に類するものがなく、初年次教育と専門教育とを繋ぐシステムを欠いている。このシステムを考案する必要がある。

3. 達成度評価

評価指標	現状における問題点の洗い出しと改善方策の構築と運用 課題の明確化と改善方策の構築と運用	評価尺度	A:運用 B:構築 C:準備 D:検討
------	--	------	------------------------------

4. 年度毎の目標値

2015年度(現状)	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
課題の明確化	Dをめざす	Cをめざす	Bをめざす	Bをめざす	Aをめざす	Aをめざす

【A票:教育研究目標2】

(タイトル)

学際的な視点・発想の獲得とその伸張。

(狙い内容)

いくつもの専門に分れた学問領域が互いに影響・浸透し合う現場に触れさせることを通じて、広い視野としなやかな発想とをもって人文学的諸課題を受け止めていける力を育てる。

1. 6年後(2021年度)のめざす姿(目標)

学際的な教育ならびに研究を可能にする環境を多様な次元において構築する。

2. 上記の目標を設定した背景、課題及び現状分析について、記述してください。

文学部では学部内副専攻制度を導入し、学際的教育に取り組んでいる。また複数の「総合科目」において、文学芸術、歴史、語学の各分野において複数の専修の教員が領域横断的に関わる科目の作成が既に行われている。これらの取り組みのさらなる周知と充実によって、学際的教育研究をさらに拡充させることを目的とする。これらに加えて、SGU構想に関連して専修を横断する国際交流プロジェクトの準備が現在進行中である。これらの計画を実現することによって、制度ならびにカリキュラムという二つの次元における学際的教育研究が実現する。

3. 達成度評価

評価指標	現状における問題点の洗い出しと改善方策の構築と運用 専修横断的な科目の再検討と充実化 国内および海外におけるセミナー・プログラムの構築と運用	評価尺度	A:運用 B:構築 C:準備 D:検討
------	--	------	------------------------------

4. 年度毎の目標値

2015年度(現状)	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
課題の明確化	Dをめざす	Cをめざす	Bをめざす	Bをめざす	Aをめざす	Aをめざす

【A票:教育研究目標3】

(タイトル)

自らが獲得した知の社会への発信

(狙い内容)

自身の学びを通じて得たものが何かを捉え直させるきっかけとして勉学の場を大学の外にも設け、社会への貢献という要素をも含んだ学問的素養の深化を図らせる。

1. 6年後(2021年度)のめざす姿(目標)

専門分野において得た知識・技能を、社会における課題解決に能動的に応用する学生を育てる教育課程を確立する。学生は、専門知識・技能を応用して現実の課題の解決を試みることで、講義を通じて得た能力を深化させ、専門性と実社会との関連を学ぶ。

2. 上記の目標を設定した背景、課題及び現状分析について、記述してください。

従来の講義中心の学習方法では、学生の応用力の及ぶ領域が専門分野、或いは、その隣接分野内に留まる傾向がある。実社会において高い専門性を発揮するためには、異なる環境において現実の課題解決を求められる「アウェイチャレンジ」による学習が必要であると考えられる。

3. 達成度評価

評価指標	・受講生自身による実践力・応用力、達成度・充足度評価 ・受講生受け入れ機関による評価	評価尺度	A: ほぼ全員の極めて高い実践力・応用力 B: 受講生約80%の高い実践力・応用力 C: 約80%の高い達成感・充足感 D: 約60%の高い達成感・充足感
-------------	---	-------------	--

4. 年度毎の目標値

2015年度(現状)	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
課題の明確化	Dをめざす	Dをめざす	Cをめざす	Cをめざす	Bをめざす	Aをめざす

【A票:教育研究目標4】

(タイトル)

他者の中で自分を開く

(狙い内容)

自分の周囲には自分とは異なる発想や考え方を持った人がいることに改めて気付かせ、そんな他者と粘り強く対話を重ねていくことを通じて自己の人的成長の端緒を掴ませていく。

1. 6年後(2021年度)のめざす姿(目標)

学生が他者との交流・対話の中から多角的な視野を持った人間として成長するための教育・研究環境を構築する。

2. 上記の目標を設定した背景、課題及び現状分析について、記述してください。

現在文学部では、異なる専修の学生がグループを組み、ディスカッションをしながら学びを深める演習科目(人文演習)を開講している。また複数の「総合科目」において、外部スピーカーによる講義を行い、異なる専門やバックグラウンドを持った人々との交流を可能にする科目を作成している。これらの取り組みをさらに発展させることによって、真の意味でのコミュニケーションを通じて人的成長を促す教育・研究環境をさらに拡充することを目的とする。さらに、留学生対象の授業科目と文学部開講科目の融合(フュージョン)科目を開講し、異なる発想や考え方を持った人々との交流を通して自己実現の端緒を掴ませるための教育的環境を構築する。

3. 達成度評価

評価指標	科目内容の再検討と充実化 フュージョン科目の構築と運用	評価尺度	A: 運用 B: 構築完了 C: 準備段階 D: 検討段階
-------------	--------------------------------	-------------	--

4. 年度毎の目標値

2015年度(現状)	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
課題の明確化	Dをめざす	Cをめざす	Bをめざす	Bをめざす	Aをめざす	Aをめざす

【A票:教育研究目標5】

(タイトル)

深い専門的知識と高度な思考能力との協同体制

(狙い内容)

小集団教育の重要性にも配慮しつつ、学生が自ら選んだ専攻分野について獲得した体系的な知と、仲間との切磋琢磨によって鍛えられた思考力とを接続させることによって、学修の集大成となる卒業論文の作成に向けて力を発揮できるようにする

1. 6年後(2021年度)のめざす姿(目標)

卒論の提出率の更なる向上と質の確保のために、演習の小規模化をめざす。また、学部全体として卒論の評価の客観性を確保する。さらに、優れた卒論を表彰するなど、学生のインセンティブとなるような制度を構築する。

4年生のほとんど(96%)が卒論提出に至っている。これは演習担当教員の優れた指導の賜物である。少数学生の卒論未提出の理由は明確ではないが、大人数の演習運営によるせいもあると考えられる。また、この大人数の演習運営は卒論の質にもかかわってくる。卒論の質に関しては、卒論の評価が指導教員のみによってなされている専修もあり、評価の客観性の問題もあげられる。卒論の質は成績には反映されるが、学生にとってそれ以外のインセンティブはない。一部の専修では、優れた卒論に対して賞を与えているが、学部全体としての動きではない。

3. 達成度評価

評価指標	大規模演習の現状分析とそれに基づく対策 現状調査とそれに基づく対策の構築 制度の検討と構築、運用	評価尺度	A:運用 B:構築 C:準備段階 D:検討段階
------	--	------	----------------------------------

4. 年度毎の目標値

2015年度(現状)	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
Dをめざす	Cをめざす	Cをめざす	Cをめざす	Bをめざす	Bをめざす	Aをめざす